

社会的再生産におけるトラッキングの果たす役割

—ベルギー・エノー州の中等学校の事例から—

Heidi KNIPPRATH

1. はじめに

教育を通じた社会的地位の再生産のメカニズムを思い描くには、ブリュデュー (P. Bourdieu 1994) がある講演⁽¹⁾で引用した次の比喩を思い浮かべればよいだろう。それは、19世紀の物理学者マックスウェル (J.C. Maxwell) が用いたデーモンの逸話に関するものである。彼はデーモンの逸話を熱力学の第二法則⁽²⁾からの逸脱の可能性を示すために考案した。等しい温度の気体が入った互いに連結されている二つの容器にあっては、デーモンが容器A内に存在する素早く運動する気体分子を容器Bへ送り、容器Bにある緩慢に運動する分子を容器Aへ送る。そしてそれによって、容器Aでは温度が下がり、容器Bでは温度が上がる。そうすることでデーモンは分子の間の差異だけではなく、序列をもつことに成功するわけだが、それは「分離」という作業がなければ不可能なことである。

ブリュデュー (1994, 40頁) によると、学校では生徒たちは連続的に「分離」されるため、学校はマックスウェルのデーモンと同じような役割を果たしている。この「分離 (以下トラッキングと呼ぶ)」を通じて生徒の間に差異ができ、その差異に従って生徒は序列化された学校または学科に振り分けられる。その振り分けの基準は学力や学習意欲といったメリトクラティックなものであるにもかかわらず、実際には生徒は両親の社会的地位によって異なった「容器 (以下トラックと呼ぶ)」に入れられてしまう。さらに、選択したトラックは最終的に得る学歴及び将来に到達するであろう社会的地位をも制限するため (Arum & Shavit 1994, Bourdieu 1994, Fujita

1984, 中西・中村・大内 1997, Rosenbaum 1976, Vanfossen & Jones & Spade 1987), 結果的に「両親の社会的地位→学校・学科の序列→本人の到達する社会的地位」という社会的なトラッキングが成立し, 学校は社会的地位の再生産に貢献することになる。

本稿では「両親の社会的地位→学校・学科の序列→本人の到達する社会的地位」という社会的なトラッキングにあって, 「学校・学科の序列→本人の到達する社会的地位」を所与のものとして, 特に「両親の社会的地位→学校・学科の序列」というトラッキングに分析の焦点を合わせる。つまり, 生徒の最終的に得る学歴及び到達する社会的地位を決定づけるトラッキングにおいて, 両親の社会的地位ごとにどのように生徒が異なったトラックに振り分けられるかを分析する。そのために, 1996年にベルギーの中等学校で行われたアンケート・調査データを解析しながら, 検証を進める。本稿で使用するデータは中等学校生の長期にわたる進学状況について収集された回顧的データであり, トラッキングが連続的に果たす機能を分析するのに最適なものと考ええる。

ベルギーでは1970年に教育改革が実施され, 生徒の興味と個性に応じた, より進学機会の拡大された教育制度の設立を目指すために総合学校が設立された。しかし, 実際にはそれはうまく機能せず, 学力及び社会的地位によるトラッキング, 進学機会を制限するようなトラッキングが残り, 改革以前よりもかえってその問題が潜在化するという結果を招いた。現在日本でも同様に, 総合学校による「個性化・多様化」という理想の実現を目指す改革が議論されているが(田中 1999), はたしてこの改革がベルギー教育制度が辿ったと同じ道を歩むことにならないのだろうか。以上の問題意識に即しながら, 検証を進めることとする。

2. 課題の設定

トラッキングに関しては多くの研究成果が既に出されているが⁽³⁾, 特に再生産との関係における研究成果は次のように大別することができる。①一つまたは限られた進学課程に焦点を合わせて, 進学するか否か, またはどのトラックに進学するかという選択に対する両親の社会的地位の直接的影響を分析した研究(Dooms & Van Damme 1989, 荻谷 1985, 菊地 1986, Shavit & Blossfeld 1993, Van de Velde & Van Brusselen & Douterlunge 1996, Vanfossen & Jones & Spade 1987, Verhoeven & Vanderkerckhove & Huyse 1992) 及び②教育上のトラックと(両親のまたは本人の到達する)社会的地位との相関を分析した研究で

社会的再生産におけるトラッキングの果たす役割

ある (Arum & Shavit 1994, 中西・中村・大内 1997)。ただし、これらの実証研究の多くは、中学校から高等学校あるいは高等学校から高等教育機関への進学時といったある一時点における生徒の両親の社会的地位による直接的影響、またはトラッキングと社会的地位との相関の分析にとどまっているため、生徒の最終的な学歴・到達する社会的地位を決定づけるトラッキングの本質に関して、両親の社会的地位が及ぼす影響を正確に描けるのかどうかという疑問も持たれる。つまり、トラッキングとは連続的に実施される過程であり、振り分けられるたびにその生徒の両親の社会的地位によって影響が及ぼされると考えられるため、非連続的な一局面における分析だけでその本質を語るのは不十分だと考えられる (Dooms & Van Damme 1989, 71 頁)。さらに、進学時における社会的地位の直接的な影響のみならず、間接的な影響も考えられる。つまり、進学に関する最も大きな説明変数が主に学力とされる場合でも、両親の社会的地位はその学力を媒介として間接的に影響を及ぼし、生徒のトラッキングを決定づけることが考えられる (Vanfossen & Jones & Spade 1987, 177 頁)。トラッキングが社会的地位の再生産に貢献することもありうるわけである⁽⁴⁾。

以上の両点を念頭においた場合、真に学校内のトラッキングにおける両親の社会的地位の直接的・間接的影響について分析するには連続面における研究が必要であると思われる。そのため、本稿の研究では特にブドン (R. Boudon 1974) の理論を応用する。

ブドンによると、教育過程とは選択時期の連続からなっている。これらの学校・学科の選択または進学するか就職するかという選択に直面する子どもとその両親は、合理的に熟考し、様々な基準に基づいて選択をする。その基準の中には社会的な地位の影響を受けている基準もあるとされるが、具体的に彼はそれについて次のように説明する。

初等教育においては一般にトラッキングは実施されていないが、生徒の学力は両親の社会的地位との相関を示すことがある。その相関をブドンは社会的地位の「第一次効果」と呼ぶ。すなわち、社会的地位の低い生徒の両親は大抵の場合学歴も低いため、両親が学習面で生徒を援助したり、刺激することができず、その生徒は結果的に文化的に不利な立場に立たされる。この文化的不平等の結果、その生徒は学校で悪い成績をとり、留年し、学年が進むにつれて次第に「遅れ」が蓄積する。最終的に初等教育を終了するときには、年齢と成績に関して生徒間に両親の社会的地位によるギャップが生じてしまう。中等教育に進学後トラッキングによる選択時期ができる

と、どのトラックで成功可能かを予想しながら選択がなされるが、「遅れ」を示す年齢と成績がまず選択決定の参考にされる。このとき、生徒の両親の社会的地位が間接的に選択に影響する可能性が生じる。さらに学力をコントロールしてみると、生徒の両親の社会的地位は直接的にも選択に影響を及ぼしていることがわかる。この社会的地位の直接的な影響をブドンは「第二次効果」と呼んでいる。「第二次効果」の原因としては、両親と子どもが直面する選択はコストと自らが期待するベネフィットを参考にして合理的に行われるが、このコストとベネフィット自体が社会的地位によって異なるため、自ずと選択も社会的地位によって異なるものとなるからとされる。ブドンはこのコストとベネフィットの意味するものについては具体的に触れていないが、例えば弁護士を目指すといった場合、それは社会的地位の高い両親を持つ生徒にとって経済的・社会的・心理的により実行に移されやすいと述べ、学歴の高い両親とその子どもにとって、そうでない両親とその子どもより高学歴を目指すコストが低く、ベネフィットが高いとしている。ブドンによれば、「第一次効果」は中等教育に入学後次第に姿を消す一方で、「第二次効果」は影響力を持ち続けるとされる。

以上のブドンによる教育過程に関する理解に基づいてベルギーの回顧的データを解析し、具体的に次の仮説を検証する。

- ① 両親の社会的地位を父親の職業と両親の学歴によって規定し、その社会的地位と学力との相関に基づくトラッキングへの社会的地位による間接的な影響が存在すること。
- ② 課程別トラッキングが実施されている中等学校において学科選択の自由が認められているにもかかわらず、選択が学力のみならず生徒の両親の社会的地位という属性によって決定づけられることから、トラッキングへの社会的地位の直接的な影響が存在すること。
- ③ 中等学校第6学年生の高等教育機関への進学希望がトラックと社会的地位によって説明されること。
- ④ 「第一次効果」は中等教育課程へ進学後しだいに姿を消す一方で、「第二次効果」は影響力を持ち続けること。

3. ベルギーの教育制度：課程別トラッキング制の変遷

生徒の両親の社会的地位が学校内のトラッキングにおいてどのような影響を及ぼしているかを検討する前に、ベルギー教育制度における課程別トラッキングの現状について触れる必要があるだろう。

社会的再生産におけるトラッキングの果たす役割

1830年のベルギー建国後の最初の世紀では、中等教育はエリート家庭出身の生徒に古典語を教えながら大学への進学準備をさせるという役割しか担っていなかった。やがて、中流階級のために就職準備をさせるという新しい役割が与えられるようになってからは、ラテン語・ギリシア語以外に大学への進学許可対象とならない現代言語や数学・理科も教えられるようになった。これらの課程を提供した普通学校以外に、世紀の変わり目には実科学校と職業学校が登場した。この二種類の学校は企業の事務職、手工業、農業などといった仕事に就くための様々な、より実用的な教育を提供するために登場したが、実科学校は職業学校よりもアカデミカルなものになることが目指された。

第二次世界大戦後ベルギーでも各国で実施されたような教育改革を行う必要性が生じ、まず中等学校から高等教育機関への進学機会を拡大することが目指されるようになった。それまでは普通学校のラテン語学科修了者のみに大学進学が認められていたが、1964年には普通学校の修了者総てと実科学校の特定の学科の修了者に進学が認められるようになった。さらに他のヨーロッパ諸国と同様に、ベルギーでも中等学校の種類（普通・実科・職業）の選択が生徒らの学力と両親の社会的地位の両方によって影響されていることが認識されるようになったことから、生徒は従来の成績及び社会的地位ではなく、興味によって学習内容を選択することができるようになるべきであるとされるようになる。それを実現するために、すべての課程を一つの学校あるいは一つの「学校共同体」⁵⁾の中に吸収し、課程の選択をより遅い時期まで延期させるという総合学校が1969年から設立され始め、「新しいタイプ中等学校」と呼ばれるようになった。ここでの第1学年及び第2学年では、実学的な授業を含んだ課程が生徒すべてに共通となる（図1）。第3学年からは改革以前のような普通系・実科系・職業系といった学科を選択するのではなく、科目選択制が導入されたため、生徒自身が多様な選択科目から個別の課程を組み合わせることができるようになった。学年が進むにつれて選択科目も増加し、組み合わせる課程の変更もある程度可能となったが、基本的に第5学年時に選んだ課程で中等学校を卒業することが望まれた。

この教育改革は子ども中心教育や混合能力学級編成などという理念を内包していたが、それらを実施することは年々困難となり、進歩的な考え方も影を潜めるようになった。まず、総ての生徒に共通であるはずの課程で第1学年には補習クラス、第2学年には既に職業系課程用準備クラスが設けられた。補習クラスは小学校時に勉強が不得意で成績の悪かった子どもを収容し、普通クラスに戻れるように補習するためのものである。職業系課程用準備クラスは第2学年時で既により実学的な授業に興味を

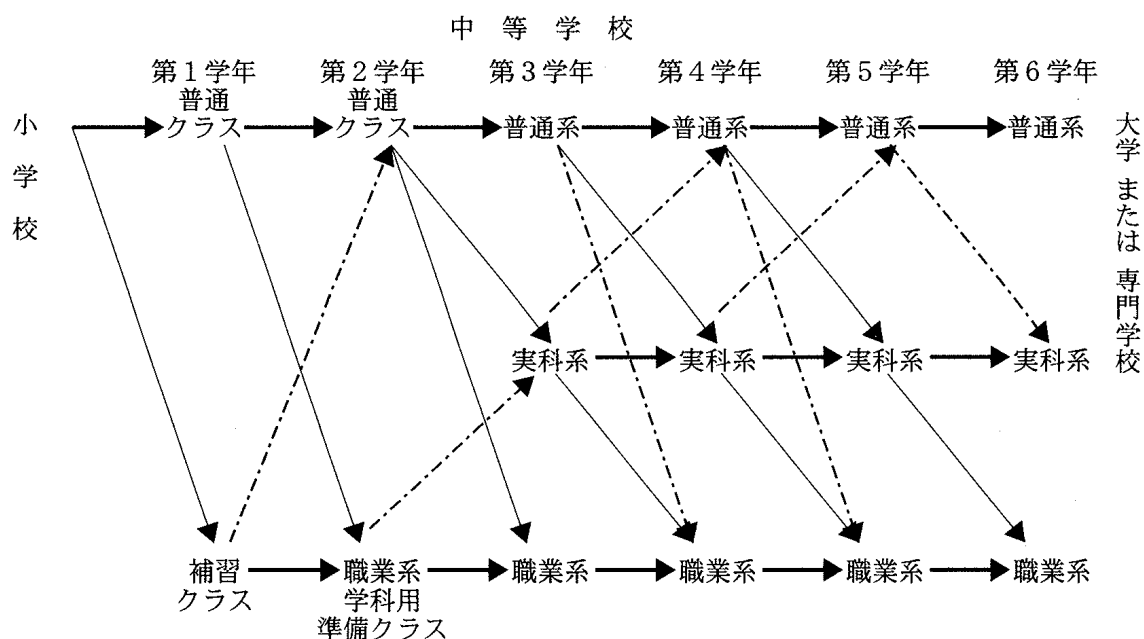


図1 ベルギーの「新しいタイプの中等学校」における進学過程

もつ子どもを収容するためのクラスである。さらに、当初第3学年から認められていた生徒が自分自身の興味のある「科目」を自由に組み合わせるとする制度が、財政的にも組織的にも継続不可能との理由から、しだいに改革以前の伝統的な普通系・実科系・職業系「学科」の選択に戻された。

現在ベルギーでは義務教育は18歳までであり、高等教育機関への進学許可は普通系学科（進学準備）の修了者総てと実科系学科（進学または就職）の修了者の一部に適性試験，入学試験，卒業資格試験なしで与えられているが，職業系学科とその他の実科系学科の修了者にも高等教育機関への道は完全に閉ざされているわけではない。これらの修了者にも第7学年の，いわゆる「専門化」と呼ばれる臨時に設けられた学年を好成績で修了すれば，普通系学科，実科系学科の修了者と同等の評価の中等教育修了の学歴が認められ，改めて進学許可が与えられることになっている⁽⁶⁾。

4. 本研究の調査概要

生徒が学校で振り分けられる際に両親の社会的地位がどのように関連しているかを検討するために，1996年にヒルトとケルクホフス（Hirtt & Kerckhofs 1987）によって集められた回顧的データを解析する。彼らはこのデータをベルギー南部エノー州にある「新しいタイプの中等学校」で収集した。

アンケート調査は段階的に行われたが，調査対象地域として南ベルギー最大の州（エノー州）の全200校にアンケート調査への協力を求め，その中から25校が協力する

社会的再生産におけるトラッキングの果たす役割

旨回答した。つづいて普通系・実科系・職業系学科の代表性に配慮しながら、最終的に25校中18校がアンケート調査対象とされた。生徒の幼稚園以後の成績・留年、両親の社会的地位に関するアンケート用紙は18校の第1学年から第6学年、第7学年までの合計6,900人の生徒に配布され、1,852人の両親が回答した（回答率27%）。ちなみに、その両親の子どもが所属する学年及び学科、生徒の性別と、同じ時期の南ベルギーにおける中等学校生の学年、学科及び性別の割合とを比較したところ、普通系学科の生徒と女子生徒が多少過剰代表されていることがわかっている（Knipprath 1999）。

5. 初等教育段階における「第一次効果」の存在と それによる中等教育進学時の出発点の相違

5.1 幼稚園入園時及び小学校入学時の年齢及び小学校における「第一次効果」

表1 幼稚園入園時・小学校入学時の年齢及び小学校における「第一次効果」
に関する線型回帰分析

	幼稚園入園時の年齢	小学校入学時の年齢	小学校での合計留年回数	小学校6年時の成績
生徒の性	-.007	.011	.042	.002
小学校入学時の年齢			.016	-.084**
小学校での合計留年回数				-.191***
父親の学歴	.006	-.050	-.044	.111**
母親の学歴	-.040	-.067*	-.123***	.118***
自営業者	.001	-.026	.017	.016
農家	.032	-.005	.028	.015
ホワイト・カラー	.018	.014	-.025	.069*
N	1469	1491	1490	1176
決定係数	.046	.103*	.181***	.351***

注意)「自営業者」、「農家」及び「ホワイト・カラー」は「労働者」に対するダミー変数である（以下の表同様）

*** p < .001 ** p < .01 * p < .05

ベルギーでは子どもを幼稚園に入園させるかどうかは全く自由であるため、何歳から幼稚園に入園させるかを決定する際に既に両親の社会的地位の直接的な影響があることが考えられる。しかし一方で、子どもを幼稚園に入園させる習慣は広く定着しており、表1の標準化回帰係数からも、子どもの入園時の年齢は父親の職業、父親および母親の学歴に影響を受けていないことがわかる。すなわち、自営業者、農業従事者及びホワイト・カラーが労働者に比して子どもをより早い時期から幼稚園に通わせる傾向は本研究のデータからは見られない。それにもかかわらず、小学校入学時の年齢は母親の学歴と相関を示し、母親の学歴が低いほど子どもがより高い年齢で小学校に

入学する。幼稚園入園時の年齢が母親の学歴によって影響されていないことから考えると、学歴の低い母親の子どもが既に幼稚園の段階で多少の遅れを蓄積したと推測することができる。

小学校入学以後は「落第制度」が存在する。このアンケート調査の子どもの12.2%が、少なくとも小学校で1回留年した経験を持ち、さらに中等学校ではその割合は41.7%にまで達する。表1によると、小学校での留年回数は母親の学歴によって説明され、母親の教育水準が低いほどその子供が小学校で留年する可能性が高くなる。さらに、小学校6年時の成績を見ると、父親がホワイト・カラーであること及び両親の学歴が有意な説明変数となっている。つまり、小学校第6学年を修了する時点に近づくほど、両親の社会的地位のため成績及び「遅れ」に関して生徒の間にギャップができていくといえる。

5.2 中等学校第1学年への進学：トラッキングの始まり

表2 中等学校第1-5学年への進学に関するロジスティック回帰分析

	モデル1	モデル2	モデル3	モデル4	モデル5
生徒の性	-.391	-.934*	-.427*	.635*	-.700
成績	.127***	2.536***	1.650***	1.482***	.957*
合計留年回数	-.999**	-1.101***	-1.424***	-.870**	-1.088*
父親の学歴					
学歴無し	-1.250	6.155	.820	-.985	4.220
小学校	.167	-1.798*	-.481	-.978	-.865
中学校	.007	-1.464*	-.322	-.227	.326
高等学校	.030	-1.098	.057	-.329	.216
母親の学歴					
学歴無し	.743	-2.669*	-.951	-.033	
小学校	-.713	-1.672*	-1.926***	.108	-.765
中学校	-1.059*	-1.407*	-1.029**	.148	.462
高等学校	-.650	-1.140	-1.246***	.027	.265
父親の職業					
自営業者	.324	6.704	-.487	.734	-.542
農家	.262	.943	-.148	-.065	.460
ホワイト・カラー	.410	-.345	.663**	.759*	.862
定数	-5.038**	-.647	-1.645*	-2.441*	-.113
N	1185	1137	801	447	289
Chi-square	87.022	121.386	174.707	36.322	19.999
df	14	14	14	14	13
有意確率	.000	.000	.000	.000	.095

注意) 父親及び母親の学歴に関しては、「学歴無し」、「小学校」、「中学校」と「高等学校」は「高等教育の学歴」に対するダミー変数である。

*** $p < .001$ ** $p < .01$ * $p < .1$

社会的再生産におけるトラッキングの果たす役割

中等学校第1学年では総ての生徒に共通した課程である普通クラスに加えて、小学校段階での遅れが蓄積し、あまり勉強の得意でない生徒を収容する補習クラスが設けられている。ここでは、小学校で生徒自身が示した学力、あるいは生徒の両親の社会的地位が進学に直接的な影響を与えたことで補習クラスに入ることになったのかどうかを、ロジスティック回帰分析を用いて検証する（表2のモデル1）。

表2にある非標準化回帰係数から、普通クラスへの進学を説明している変数は小学校第6学年時の「成績」と小学校卒業までの合計「留年回数」といった「メリトクラティック」な変数であると結論することができる。言い換えれば、他の総ての説明変数をコントロールした場合、小学校第6学年時にとった成績が良いほど、その生徒が普通クラスへ進学する可能性は高くなる。また、同様に他の総ての説明変数をコントロールした場合、小学校で留年した回数が多いほど普通クラスへの進学の可能性が減少することがわかる。結果として、補習クラスは設定された目的通り、小学校での留年によって遅れが蓄積され、第6学年時の成績の悪かった生徒が集められているといえる。そして、上述したような学力に関する生徒間の両親の社会的地位によるギャップができあがっていることから、結果的に主にホワイト・カラーではない両親及び学歴が低い両親の子どもが補習クラスに入ってしまったといえる。ただし、これら「メリトクラティック」な変数以外に、生徒の母親の学歴という要因も有意な説明変数となっている。すなわち、中学校卒業の母親の子どもは高等教育機関の学歴をもつ母親の子どもより補習クラスへ進学する傾向がある。このことから、「劣っている学力」という間接的要因のみならず、生徒の両親の社会的地位という直接的要因もトラッキングに影響を及ぼしているといえる。

6. 課程別トラッキングを採用する中等教育における生徒のクラス・学科選択のパターン：社会的地位の「第一次効果」及び「第二次効果」

6.1 中等学校における生徒のクラス・学科選択のパターン

留年のため「遅れ」を蓄積した結果、卒業前に18歳になって退学しないかぎり、中等学校を通して生徒は少なくとも6年間は様々な道を歩み、多くの選択時期に直面する。退学しないとした場合、それはまず留年するか進学するかという選択となって現われ、つづいて以前所属していたものと同じクラス・学科、あるいはそれとは異なったクラス・学科で留年・進学するかという選択となる。つまり、ブドンが語る二者択一とは異なり、本研究での中等学校生は理論上、毎年学年修了時に六つの選択肢から一つを選ぶことができる。それらの選択総てに「第二次効果」と学力の双方の影響が

存在しているのかについて確認するには紙幅の都合上無理があるため、解析の課題を簡素化する。そのために、まず以上の六つの理論上可能な選択肢の中で頻繁に登場する選択肢を図1で検討する。便宜上留年という選択肢は省略されている(Knipprath 1999)。この図1では次の2点が注目される。

第1に、小学校卒業後普通クラスに入る生徒は補習クラスに入る生徒より多く、さらに進学する際に同じクラスまたは同じ学科に残る生徒が最も多い(太線)。しかし、普通クラスから職業系学科用準備クラスへ、普通クラスから実科系学科および職業系学科(第3学年進学時のみ)、実科系学科から職業系学科に入る生徒も少なくない(細線)。逆に、補習クラスから第2学年の普通クラスへ、実科系学科から普通系学科へ進む生徒は最も少なく(点線)、職業系学科から実科系学科に移る生徒は存在しない⁽⁷⁾。つまり、次のような学科変更のパターンが存在することがわかる：**普通系学科(または普通クラス)→実科系学科(または補習クラス・職業系学科用準備クラス)→職業系学科**。さらに、ここでは示されていないが、第5学年以後は一部の例外を除き制度上学科を変更することができなくなるため、移動状況は安定する。

第2に、第1学年、第2学年での留年・進学において、補習クラスから普通クラスへ移る生徒が最も少なく、進学する場合でも補習クラスから職業系学科用準備クラスに移り、さらにそこから最終的に第3学年の職業系学科に進学する。このことは、補習クラスは小学校で遅れが蓄積した生徒を収容するが、補習授業は彼らを普通クラスに戻すことには貢献しておらず、実際には職業系学科用準備クラスおよび職業系学科への進学を固定化するような役割を果たしていることを表している。しかも、前節での解析から明らかになったとおり、直接・間接的要因によって主に社会的地位の低い両親の生徒が補習クラスに入ることから、補習クラスから職業系学科へ進学する生徒も主に社会的地位の低い両親の生徒であると推測することができる。

結果として、進学する際に選択するクラス・学科が生徒のそれまでの学力と両親の社会的地位の直接的な影響を受けているかについて解析するには、上述した選択肢のパターンとサンプルの大きさから、第2学年の普通クラスまたは他のクラスに進学するか、あるいは第3-5学年の普通系学科または他の学科に進学するかのみ焦点を絞る必要がある。逆に、どのような理由でどのクラス・学科に留年するかについては、データ不足とサンプルの小ささによって本稿では解析することは不可能であり、留年するか進学するかという選択は中等教育における社会的地位の「第一次効果」として解析する。

6.2 中等学校における学科選択における「第二次効果」及び学力の影響

表2では、普通クラスの生徒が第2学年へ進学する際に普通クラスを選択するか否か（モデル2）、第3学年へ進学する際に普通系学科を選択するか否か（モデル3）、普通系学科の生徒が第4・5学年へ進学する際に普通系学科を選択するか否か（それぞれモデル4とモデル5）がロジスティック回帰分析によって解析されている。この表2の非標準化回帰係数を概観すると、これらの4つの進学に関して普通クラス・普通系学科への進学を説明する変数としては成績と小学校から進学時点までの合計留年回数があることがわかる。つまり、学年末の成績が良いほど生徒は普通クラスまたは普通系学科を選ぶ傾向がある。つづいて小学校から進学時点までの合計留年回数が多いほど普通クラス・普通系学科で勉強することをあきらめ、職業系学科用準備クラスまたは実科系学科・職業系学科を選択する可能性が大きくなる。このことからブドンが述べたように、選択時点において生徒は成績及び「遅れ」を意味する留年回数を参考にして、恐らく様々なトラックのどれで成功するかを予想しながら一つのトラックを選択している。これが、課程別トラッキングが実際には能力別集団化という機能を果たしていると解釈しうる根拠ともなっている。このような生徒の学力差は普通系学科対実科系・職業系学科といった格差を生み出すだけでなく、第3・4学年で実科系学科に属する生徒が進学する際に、職業系学科を選択する生徒が引き続き実科系学科に進学する生徒よりも成績が悪いという結果を導く原因にもなっていると考えられる（Knipprath 1999）。

ところで、メリトクラティクな要因以外に、生徒の両親の社会的地位も有意な説明変数となっていることがわかる。学力をコントロールした場合、第2学年への進学に関して、母親が学歴を有さないか、両親の学歴が小学校・中学校である生徒、及び女子生徒は、それが高等教育レベルである生徒と男子生徒に比べ、普通クラスから去ることが多い。第3学年への進学に関しては、母親の学歴が高等教育レベルのものであり、父親がホワイト・カラーである生徒と女子生徒に比べると、母親の学歴が小学校・中学校・高等学校のものであり、父親が労働者である生徒及び男子生徒のほうが実科系・職業系学科を選択しやすい。さらに第4学年への進学に関して、父親がホワイト・カラーである生徒及び女子生徒に比べ、父親が労働者である生徒及び男子生徒は普通系学科から去りやすい傾向を示す。しかし、第5学年への進学になると学科の選択に際しての両親の社会的地位の影響は姿を消し、「第二次効果」が消失する。

6.3 中等学校における「第二次効果」

表3 中等学校における「第一次効果」に関する線型回帰分析

	第1学年 時の成績	第2学年 時の成績	第3学年 時の成績	第4学年 時の成績	第5学年 時の成績	中等教育にお ける留年回数
生徒の性	.006	.065	.109**	.077	.024	-.154***
クラス・学科	.000	-.029	.013	.046	-.099	-.329***
学年						.212***
父親の学歴	.084*	-.073	-.066	.054	-.170	.032
母親の学歴	.034	.137**	.087	.093	.131	-.067*
自営業者	-.030	-.031	-.014	-.091	-.076	.017
農家	.015	.021	.015	-.010	-.081	.011
ホワイト・カラー	-.023	.035	.014	-.072	.069	.029
N	1202	882	619	430	186	1492
決定係数	.011	.020*	.018	.026	.042	.200***

*** p < .001

** p < .01

* p < .05

これまでのところ、学力によって生徒が各トラックに振り分けられるものの、その学力をコントロールした場合に生徒の両親の社会的地位も選択に直接的に影響を及ぼすことが確認された。では、中等学校では今も生徒の両親の社会的地位による学力の相違は以前に指摘されていたように存在しつづけているのだろうか。ここでは、クラス・学科をコントロールした後⁽⁸⁾、中等学校生の各学年における成績および中等学校での留年回数が両親の学歴または父親の職業によってどのように説明されるかを線型回帰分析によって検証する。

表3を見ると、成績の解析結果に関してはどの学年においても決定係数は非常に低く、2%すら超えることがないことがわかる⁽⁹⁾。さらに、標準化回帰係数から、両親の社会的地位に関する説明変数としては、第1学年では父親の学歴、第2学年では母親の学歴のみが有意で、両親の学歴が高いほど生徒の成績も良くなる。第3学年では女子生徒は男子生徒よりも良い成績をとる傾向がある。結論として、トラッキングが進むにつれて、生徒の両親の社会的地位と成績との相関が消えるといえる。

次に、生徒の中等学校に入ってから留年回数の解析結果に関して、決定係数は上述の解析の場合よりも大きく、20%にも達している。そして小学校における場合と同様に、他の変数をコントロールしても生徒の母親の学歴と留年回数との相関は見られる。他の有意な説明変数は性別、クラス・学科および学年である。つまり、学年が進むにつれ生徒の中等学校での留年回数は増加するが、男子生徒のほうが女子生徒よりも留年回数が多いことが標準化回帰係数から明らかとなる。最も留年回数が多い生徒は補習クラス、職業系学科用準備クラス、職業系学科に属しているが、それは生徒が

社会的再生産におけるトラッキングの果たす役割

特にそれらのクラス・学科で留年しているということではなく、先のロジスティック回帰分析からも判明したように、生徒が小学校、普通暮クラス、普通系学科で留年した後他の学科へ移るからであると解釈すべきである。

以上の解析結果から、成績に関しては課程がまだほぼ生徒全員に共通であるとされる段階（第1・2学年）で両親の社会的地位と成績との相関が初等教育と同じように存在していることが確認できる。さらに、トラックへの振り分けに際して、より社会的地位の低い生徒はその後「遅れ」を蓄積することによって、メリトクラティックな要因を媒介としながらも両親の社会的地位による間接的な影響を受ける。そのため、最終的に相次ぐトラッキングの結果、中等教育修了時点に近づけば近づくほどトラックごとに生徒の両親の社会的地位も異なってくることが推測できる。

7. トラックおよび生徒の出身階層でみた高等教育機関への進学希望

以上の解析結果から、卒業する予定である学科ごとに生徒の両親の社会的地位は異なるだろうが、中等学校卒業とともにトラッキングが終了するわけでもない。今回利用したアンケート調査では実際に進学するかどうかについてのデータは集められなかったが、高等教育機関への進学希望というデータを用い、学科またはそれをコントロールした後に生徒の両親の社会的地位がそれに影響を及ぼしているかどうかを検証した。

表4 中等学校第6学年生の進学希望に関する線型回帰分析 (N=173)

生徒の性	父親の学歴	母親の学歴	自営業者	農家	ホワイト	留年回数	実科系学科	職業系学科	決定係数
.069	-.027	.181*	-.018	.064	.267**				.131***
.014	-.018	.057	.008	-.004	.145	-.179**	-.160**	-.514***	.435***

*** p < .001 ** p < .01 * p < .05

被説明変数は中等学校修了後さらに何年教育を受け続けるかであり、回答は大学・長期専門学校（4年）、短期専門学校（3年）に進学するか、または就職するか（0年）であった。表4の標準化回帰係数を見ると、生徒の進学希望が両親の社会的地位によって有意に説明できることがわかる。母親の学歴が高いほど進学希望が強く、生徒はより長く勉強する予定である。つづいて、ホワイト・カラーの子どもも労働者に比べると進学希望が強いことがわかる。しかし、以上の線型回帰分析のモデルに小学校から第6学年までの合計留年回数及び所属するトラックを考慮すると、その社会的地位の影響が見られなくなる。このことから、生徒は初等教育から中等教育修了までの間に「遅れ」を蓄積するほど進学希望が冷め、恐らくこの選択時期においても生徒

がそれまでの学力を参考にし、高等教育の様々なトラックでの成功の可能性を考慮しながらその中の一つを選ぶといえる。さらに、職業系学科の第6学年生では52%が進学の希望を表明しているが、実科系学科の生徒と同様に普通系学科の生徒のそれよりも低い。

結論として、生徒の両親の社会的地位による直接的な影響（「第二次効果」）は姿を消したといえるが、生徒の進学希望は学校で蓄積した「遅れ」及び卒業する予定のトラックによって媒介されながら生徒の両親の社会的地位によっても間接的に説明される。

8. 結論と今後の課題

本稿ではベルギーで収集されたデータを用いて、最終的に得る学歴及び到達する社会的地位を決定づける学校内のトラッキングにおいて、両親の社会的地位がどのように生徒を異なったトラックに振り分けるかを分析した。その際、特にブドンの理論に基づき、連続面における生徒の両親の社会的地位による直接的な影響だけでなく、間接的な影響にも焦点を合わせた。

1970年の改革でベルギーの総合学校では科目選択制が導入されたが、現実的な制約からしだいに改革以前の学科による伝統的課程別トラッキングに回帰していった。したがって、生徒の興味によって学科選択を行うという自由が認められているにもかかわらず、結果的には以前同様学科選択は学力と社会的地位に影響され続けている。例えば、小学校入学時に学歴の低い、したがって学歴の低い母親の子どもは既に幼稚園でわずかながらも「遅れ」を背負う。また、小学校での留年回数も母親の学歴により説明される。小学校第6学年の成績も両親の学歴と父親の職業との相関があるため、初等教育を修了するときには両親の社会的地位によって「遅れ」と成績に関して生徒間にギャップが生じてしまう。中等教育に進学してから後はトラッキングによる選択が始まり、その際どのトラックで成功可能かを予想しながらトラックが選択されるため、生徒とその両親は「遅れ」を示す年齢と成績を参考にするようになる。全生徒に共通である最初の2年の課程においては成績と両親の学歴との相関が存在することから、生徒の両親の社会的地位が選択に間接的に影響しているといえる。しかも、成績に関してはブドンが述べているように「第一次効果」はしだいにその姿を消すが、中等学校でも蓄積する「遅れ」に関してはそうとはいえないため、後者を介して生徒の両親の社会的地位が間接的にトラッキングに影響しつづける。さらに学力をコントロールした場合、両親の社会的地位が直接的にも選択に影響することも明らかとなっ

社会的再生産におけるトラッキングの果たす役割

た。ブドンは「第二次効果」は影響力を持ち続けると述べたが、本稿のデータからは「第二次効果」も第5学年へ進学して後は姿を消すという結果が出た。高等教育機関への進学予定に関しても、生徒の両親の社会的地位は直接的にではなく、学校で蓄積した「遅れ」及び卒業する予定のトラックによって媒介されながら間接的に影響を与える。高等教育を受けるかどうかについては両親の社会的地位との相関が存在するにもかかわらず、ブドンの理解とは異なり、両親の社会的地位の影響は高等教育機関への進学時に直接にはたらくからではなく、トラッキングのより早い段階において両親の社会的地位によって生徒が異なったトラックに振り分けられたからであると考えられる。この点については、他の国に関する研究でも同様のことが指摘されている(Raftery & Hout 1993, Shavit & Blossfeld 1993)。

結論として、中等教育過程におけるトラッキングは生徒間の差を制度化することで、彼らが最終的に得る学歴や到達するであろう社会的地位を制限し、社会移動の媒介変数となっているといえる。その意味で、トラッキングは両親の社会的地位の影響を受けることによって社会的地位そのものの再生産に貢献していることになる。さらに、連続面を通じた分析によって、トラッキングを通じた「分離」が中等教育過程における選択時に常に現われ、その際両親の社会的地位も常に影響を発揮していることが明らかとなった。ただし、この影響も学年が上がるに従って消失し、その現れ方も低学年では直接的（両親の社会的地位）・間接的（学力・留年）の両方である一方、学年が進むとともに直接的な影響と学力を媒介とした間接的な影響は消え、高等教育への進学は卒業するトラックと留年による遅れのみに影響を受けるようになる。

本研究のデータはベルギーの教育制度に関するものであったが、連続面におけるトラックの振り分けに関する両親の社会的地位の直接・間接的な影響について、他の国の教育制度研究にも応用する価値はあるだろう。日本では「落第制度」がなく、蓄積される「遅れ」という現象はみられないが、入学試験制度によってベルギーよりも（学力別）トラッキングがより明確に実践されている。そのため、トラッキングが始まる前に既に生徒の両親の社会的地位と成績との相関が現われ、両親の社会的地位による間接的な影響（潮木 1975）及び直接的な影響（菊地 1986, 潮木 1975）が現われるという傾向も既に観察されている。生徒が希望進路や学びたい学習内容ではなく、合格の可能性で高校を選択する形態が確立されていたことを受けて、最近日本でも総合選択制高校が設立された。しかし、総合選択制高校に入学してからの科目選択に対する学校側の「枠付け」（田中 1999）のみならず、その「枠付けされた」科目選択からなる課程の選択が学力及び両親の社会的地位によって影響されているかどうか

かという点も今後注目に値する研究課題となるのではないだろうか。

〈注〉

- (1) 東京大学での1989年10月の講演
- (2) 「熱は自ら進んで冷たい物質から暖かい物質へは流れない」という法則。
- (3) トラッキングが早い時期から連続的に生徒を同質集団へ振り分け、進路機会及び到達する社会的地位を限定するのみならず、他の様々なトラッキングの効果にも注目が集まっている。トラッキングによって進学する希望（菊地 1986, 刈谷 1985, Vanfossen & Jones & Spade 1987）、学習意欲（菊地 1986, Rosenbaum 1976）、トラッキングの下位文化（菊地 1986, 刈谷 1985, Vanfossen & Jones & Spade 1987, Oakes 1985）、授業の内容・教師の教え方（菊地 1986, Oakes 1985）、将来に到達する社会的地位への社会化（Rosenbaum 1976, Bowles & Gintis 1976）等がトラックごとに異なることを明らかにした研究もある。
- (4) C. Montgomery Broaded (1997) は台湾の中等教育におけるトラッキングの実証研究を行った。そこではどのトラックに進学するかは主に学力によって説明されているが、その学力が両親の社会的地位によって影響されている可能性があることを見逃している。そして結果として、台湾におけるトラッキングが両親の社会的地位の影響を消去し、平等な教育機会を提供する教育制度であると結論づけられている。
- (5) 近隣地域に存在する複数の学校が相互に協力し、その地域の生徒に総てのコースが提供されるような学校間協力体制。
- (6) ベルギーに芸術学校も存在するが、現在ではそれは全中等学校生の0.2%を占めるにすぎない。
- (7) 太線は次の学年に進学する生徒の80%以上、細線は5-16%、点線は1-3%を占めていることを表す。
- (8) クラス・学科という説明変数は連続データであり、普通クラス及び普通系学科を3、実科学科を2、補習クラス・職業系学科用準備クラス及び職業系学科を1とした。その理由としては、学科の間に生徒の従来の学力に基づいて序列を付けることができること、補習クラスと職業系用準備クラスは職業系学科への進学を固定化するような役割を果たし、職業系学科と同じカテゴリーとして扱うことができることによる。

社会的再生産におけるトラッキングの果たす役割

- (9) アンケート実施の時点ではまだ第6学年の成績は存在していなかったため、今回の線型回帰分析に含まれていない。

〈参考文献〉

- Arum, Richard & Shavit, Yossi 1994, *Another look at tracking, vocational education and social reproduction*, European University Institute.
- Bonte, Eddy 1981, *Tien jaar VSO*, Kritak.
- Boudon, Raymond 1974, *Education, opportunity and social inequality*, John Wiley & Sons.
- Bourdieu, Pierre 1994, *Raisons pratiques, sur la théorie de l'action*, Editions du Seuil.
- Bowles, Samuel & Gintis, Herbert 1976, *Schooling in capitalist America: educational reform and the contradictions of economic life*, Basic Books.
- Brooded, Montgomery C. 1997, "The limits and possibilities of tracking: some evidence from Taiwan", *Sociology of education*, Vol.70, pp. 36-53.
- Dooms, J. & Van Damme, J. 1989, "Het cumulatief effect van het sociaal milieu op de schoolloopbaan in het secundair onderwijs en op de overgang naar het hoger onderwijs", in *Jongeren in school en beroep (Bijdragen aan de onderwijsresearch n 25)*, ed. by Van Damme, J. & Dronkers, J., Swets & Zeitlinger, pp. 69-79.
- Fujita, Hidenori 1985, "The structure of opportunities for status attainment: the role of education and social tracking", *Daigaku ronshu*, No.14, pp. 133-167.
- Hirtt, Nico, Kerckhofs, Jean-Pierre 1997, *Inégaux devant l'école, enquête en Hainaut sur les déterminants sociaux de l'échec et de la sélection scolaires*.
- 荻谷剛彦 1985, 「高等学校の階層構造と教育選抜のメカニズム」『高等教育研究紀要』第4号, 11-28頁。

- 菊地栄治 1986, 「中等教育における『トラッキング』と生徒の分化過程」『教育社会学研究』第41集, 136-150頁。
- Knipprath, Heidi 1999, 「文化的・社会的再生産におけるトラッキングの果たす役割ーベルギー・エノー州の中等学校の事例からー」(京都大学大学院教育学研究科1998年度修士論文)。
- 中西裕子・中村高康・大内裕子 1997, 「戦後日本の高校間格差成立過程と社会階層」『教育社会学研究』第60集, 61-82頁。
- Oakes, Jeannie 1985, *Keeping track, how schools structure inequality*, Yale University Press.
- Raftery, Adrian E. & Hout, Michael 1993, “Maximally maintained inequality: expansion, reform and opportunity in Irish education, 1921-1975”, *Sociology of education*, Vol.66, pp. 41-62.
- Rosenbaum, James E. 1976, *Making inequality, the hidden curriculum of high school tracking*, John Wiley & Sons.
- Shavit, Yossi & Blossfeld, Hans-Peter ed. 1993, *Persistent inequality: changing educational attainment in thirteen countries*, Westview press.
- 潮木守一 1975, 「進路決定過程のパス解析ー高校進学過程の要因分析ー」『教育社会学研究』第30集, 75-85頁。
- 田中葉 1999, 「『総合選択制高校』科目選択制の変容過程に関する実証的研究ー自由な科目選択の幻想ー」『教育社会学研究』第64集, 143-162頁。
- Van de Velde, Veerle & Van Brusselen, Bea & Douterlunge, Mia 1996, *Gezin en school, een onderzoek over het gezin als indicator voor de schoolloopbaan in het secundair onderwijs*, HIVA.
- Vanfossen, Beth E. & Jones, James D. & Spade, Joan Z. 1987, “Curriculum tracking and status maintenance”, *Sociology of education*, Vol.60, pp. 104-122.
- Verhoeven, D., Vanderkerckhove L. & Huyse, L. 1992, *In de buitenbaan –nog steeds? De onaantrekkelijkheid van de intellectuele beroepen voor het werksmilieu*, Acco.

ABSTRACT**A Case Study on the Contribution of Tracking
to the Reproduction of Social Stratification****Heidi KNIPPRATH**

(Graduate school, Kyoto University)

Yoshida-honmachi, Sakyo-ku, Kyoto-shi, Kyoto, 606-8501 Japan

Tracking takes place when students are grouped with those who are similar to themselves. This grouping is based on a ranked criterion, and therefore the groups are unequal in status. The criterion can be ability or post school plans, but students are also often divided along socioeconomic lines. Furthermore, previous research has shown that the track which students belong to seems to determine future opportunities in society.

This paper uses data collected at Belgian comprehensive schools to clarify how the social background of students determines which track they enter, on the assumption that the track will define future social position. Previous research regarding tracking and social reproduction has limited its attention to either the correlation between track and social background of the students, including one or more educational transitions, or to the direct influence of social background on educational transition. In this paper, Raymond Boudon's theoretical concepts are used to demonstrate both direct and indirect influences of social background on consecutive educational transitions, starting from kindergarten. The paper demonstrates: (1) the enduring existence of the indirect influence of social background on tracking through the correlation between students' ability and social background; (2) the existence of a direct influence of social background on tracking, as the free choice of a track is determined not only by ability but also by social background; (3) the disappearance of this direct influence at the end of the secondary level; and finally (4) the correlation between ability, tracking and the educational plans regarding whether or not to go on to college, which affects students just before graduation from high school. From this analysis it can be concluded that as students are divided into tracks along socioeconomic lines, the school and its tracking system contributes continuously to the reproduction of social stratification, assuming that tracking at the secondary level determines future social position.